

本田財団レポート No.114

「日本の活力と風格」

元駐チェコ大使

金沢学院大学学長 日本科学未来館総館長

石 田 寛 人

講師略歴

石田 寛 人 (いしだ ひろと)

元駐チェコ大使
金沢学院大学学長 日本科学未来館総館長



《略 歴》

- 1941年 9月 石川県生まれ
- 1964年 3月 東京大学工学部原子力工学科卒業
- 1964年 4月 科学技術庁入庁
- 1982年 1月
駐米日本大使館 科学技術担当参事官
- 1985年 4月
- 1989年 6月 科学技術庁官房審議官
- 1991年 6月 同原子力局長
- 1994年 7月 同科学審議官
- 1995年 6月 同事務次官
- 1998年 6月 科学技術庁退官
- 1999年 11月 駐チェコ大使就任
- 2003年 2月 同退任 外務省退職
東京大学生産技術研究所客員教授
(独)科学技術振興機構
研究開発戦略センター上席フェロー
- 2004年 4月 金沢学院大学学長 金沢学院大学短期大学学長
- 2005年 7月 日本科学未来館総館長

《主な受賞歴》

- 1992年 「文楽なにわ賞」佳作 秋津見恋手鏡(あきつにみる こひのてかがみ)

《主な著書》

- 1966年 「欧米諸国の原子力法」伸松堂書店 刊行 原子力発電法制研究会
堤 富雄、田中好雄 共著
- 2000年 歌舞伎台本 「銘刀石切仏御前」(めいとういしきり ほとけのおんまえ)
監修 後藤長平 北国新聞社

このレポートは平成18年2月27日パレスホテルにおいて行われた第97回本田財団懇談会の講演の要旨をまとめたものです。

只今ご紹介をいただきました金沢学院大学学長の石田でございます。今のご紹介で私の事は全て尽きておりますが、大切な1項目を付け加えますと、私は昭和57年から60年までの3年間、ワシントンの在米大使館に勤務し、本日お見えの大河原良雄大使の下で働かせていただきました。その時、私は在外勤務が初めてでありましたので、大河原大使や同じく本日お見えの、当時在米大使館参事官であられた法眼健作大使たちにいろいろ教えていただきました。チェコでも、その教えに従って仕事をいたしました。私自身は、それほど優れた大使でなかったかも知れませんが、チェコではいつもワシントン時代を思い出しながら勤務した事を、今また懐かしく思い出しております。

本日は、「日本の活力と風格」というタイトルですが、私には、それほど立派な事を申し上げる見識はありません。チェコにおける体験と、チェコから帰り故郷の金沢に戻って仕事をしていて、見聞きしている事について申し上げたいと存じます。

プラハの桜

私は1999年の年末、チェコに赴任いたしました。チェコは人口約1,000万。面積は北海道とほぼ同じ。首都プラハは北緯50度に位置します。チェコやその周辺の国々は、かつては東欧の国と言われましたが、今は中欧と呼ばれる事を望んでいます。現在、チェコの経済は大きく発展しつつあります。この国の工業力は、かつてはハプスブルク帝国（オーストリア・ハンガリー帝国）の工業生産の60数%を旧チェコスロバキアの地域で生産したほどでありました。しかし、計画経済の下では、厳しい状況にあったようですが、今急速に工業力を回復しております。一人当たりのGDPは、私が勤務しておりました時には約5,000ドルでありましたが、最近の統計では、9,000ドル程度になっています。チェコの旗印は、民主主義、基本的人権、市場経済化で、政治に関しては、政策的には安定していますが、選挙制度の関係もあって、政局は時々揺れ動く事があります。

（図 1）これはプラハで撮ったソメイヨシノの写真です。プラハでもソメイヨシノは咲きますが、育ち方はこの程度であります。



図-1

(図 2) これは私が住んでいた公邸前のヤエザクラです。ソメイヨシノと違って、山桜系統のヤエザクラはこのようになり美しく咲きます。



図-2

(図 3) これはプラハの中心部に、20世紀初頭に作られたプラハ市民会館です。名前は地味ですが、ここで5月12日に「プラハの春」の音楽祭が始まります。

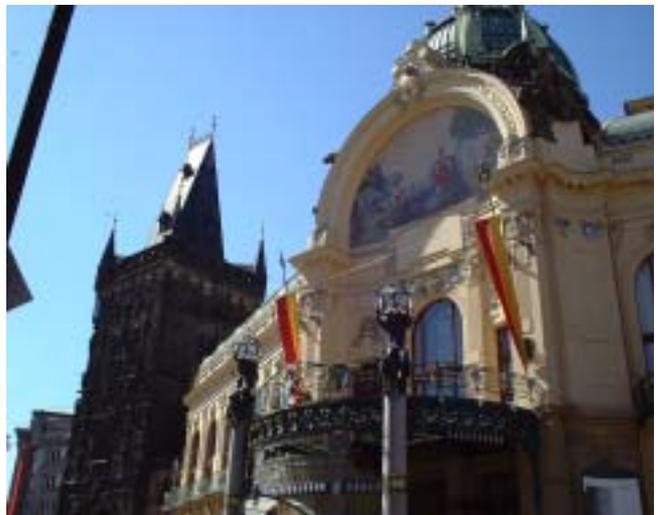


図-3

(図 4) これはプラハ観光で多くの方が通られるプラハ城の北口です。観光客は北口の手前でバスを降りて、ここに写っているように、10人から20人ほどの固まりになりながらプラハ城に入って行くというのが一般的なコースです。



図-4



図-5

(図 5) これはプラハの街を 2 分して流れる川で、チェコ名はヴルタヴァ川、ドイツ名でモルダウ川です。左側にちょっと見えているのがカレル橋でプラハ観光の中心です。ヴルタヴァ川はプラハを流れるあたりでは堰のような小さい段差がいくつかあって、そのために川は音を出しながら流れています。こうして見ると川幅は広いようですが、ヴルタヴァ川はエルベ川の支流であり、ドナウ川ほどではありません。

19 世紀以後のチェコ

チェコは西スラブの国で、西部のボヘミア、東部のモラヴィアと極く一部のシレジアからなり、欧州の十字路、欧州の心臓部に位置します。この地域は東西の接点にあたり、西にはゲルマン、東にはスラブ、南西にはラテン、南東にはビザンチンという大きな勢力があって、その中で揉まれる歴史を重ねて来ました。中世にさかのぼると、ボヘミア王は神聖ローマ皇帝を選ぶ 7 選帝侯の一人でした。14 世紀にはボヘミア王のカレル 4 世が神聖ローマ皇帝となり、プラハは神聖ローマ帝国の都になります。しかし、1620 年に起きたビーラー・ホラの戦いが大きな転回点でした。ビーラー・ホラは「白い山」の意味ですが、深い山どころかプラハ都心からすぐ近くで、ここでハプスブルク軍とボヘミア軍が激突しました。結果、ボヘミア軍の運命は、関が原の戦いにおける西軍の運命でありました。これ以後 300 年、ハプスブルク帝国に政治的な屈伏を強いられました。



図-6

(図 6) 見にくい絵ですが、15～16世紀に作られた地図のようなものです。プラハがヨーロッパの中心部、十字路にあることを表しています。考えてみますと、中央部に位置するという事は大変な事です。結局、外に向かって発展して行ったのは、ヨーロッパの内陸の中央部よりはむしろ、スペイン、ポルトガルなど、海洋に面した辺縁部の国々でありました。なお、普通我々が長靴と思っているイタリア半島は、この絵では「右手」になっています。

(図 7) プラハのカレル橋の上には、こういう像が全部で30体立っています。写真の像は、東方からボヘミアに光をもたらしたと言われている聖キュリロスと聖メトデウスで、チェコ人が大切にしている聖人の像です。



図-7

(図 8) プラハの旧市街広場に建っているのが、宗教改革に先鞭をつけ、1415年に焚刑に処せられたヤン・フスの像です。そのためにこの広場は「ヤン・フスの広場」と呼ばれています。



図-8

(図 9) これは中央ヨーロッパでは最も古い、1348年創設のカレル大学の一部です。この古い部分は、多分、創建当初の物ではないでしょうが、大事にして長く保存されて来ました。

1918年にチェコは、チェコスロバキアとして独立します。チェコは古いボヘミア王国の歴史も持っていますから、独立の回復とも言えます。当時の指導者はマサリクという初代大統領で、これ以降、チェコスロバキアは、その歴史的背景を生かして、工業国として急速に発展します。しかし、1938年に、かのミュンヘン協定により、チェコの西部、ドイツとの国境近くの地域であるスデーテン地方をヒトラーに割譲する事になり、その後、保護領となって、ヒトラーの支配下に入ります。その後、第二次大戦が終わったのもつかの間、1948年に共産主義体制の下に入ってしまう。



図-9

それから 20 年経って、1968 年に「プラハの春」の事件が起こり、その後の「正常化」コースで計画経済が続きます。そして、ついに 1989 年、チェコでは「ビロード革命」、ドイツではベルリンの壁の崩壊が起こり、チェコは市場経済化の道を歩み出しました。1993 年にはチェコとスロバキアが分離しました。

(図 10) これはチェコスロバキア初代大統領のマサリクの像です。現在、チェコの歴史上最も尊敬されている人物は、この人であるという専門家の調査があります。



図-10

(図 11) これはヴルタヴァ河畔に建つダンシングビルです。耐震強度偽装のような事があって、グニャと壊れかけたという訳ではありません。こういう建物は、あまり便利な物ではないかも知れませんが、景観としてはプラハっ子の間では賛否さまざまで、物議をかもしています。しかし、中にはおいしいフランス料理屋などもあり、訪問者は多いようです。



図-11

(図 12) これはプラハ城の正面です。正面から見ますと、プラハ城はそれほど変わった形はしておりません。後ろに見える二つの尖塔は、聖ヴィート教会の塔で、プラハの町の中のかかしこから見えます。この教会は、王宮の庭にあり、プラハを象徴する大きな教会です。



図-12

(図 13) これは食べ物について一言触れようと思って持って来た写真です。チェコでは、基本的には牛肉よりも豚肉を多く食べたようですが、最近は牛肉もよく食べます。この写真は、仔豚の丸焼きを切りとったものです。横にあるのは、パンではなくクネドリーキと呼ばれるもので、チェコの典型的な食べ物。豚肉への付け合わせで、豚肉の汁等を含ませて食べます。グラスに入っているのはベヘロフカという 38 度の薬草酒で、社交の席でも使われます。



図-13

(図 14) これはプラハから数時間離れた所にあるカルロヴィ・ヴァリという温泉場で、ここでは映画祭も行われます。この温泉は飲む温泉で、ここに滞在して、温泉を飲んで、保養をします。



図-14

汎ヨーロッパ主義の動き

旧東欧は人口、面積の大きくない国が多数あります。チェコの人口は約 1,000 万。ハンガリーもほぼ同じような人口です。オーストリアはそれよりも少ない。こういう国々ですから、ある国を訪れて車で数時間走るとすぐ次の国境に行ってしまう、国境では大型トラックが延々と通関手続を待つ事になります。これを見ると、必然的にこういう状況を改善したいという気持ちが湧き起こります。第一次世界大戦の前後、特にアメリカのウイルソン大統領の提唱により、民族はなるべく自分の国を造ろうという、民族自決主義の大きな動きがありました。またそれとは別に、ヨーロッパ全体が強くとまらなければならないという運動も起きました。民族自決主義と汎ヨーロッパ主義、これが二つの大きな流れでありました。

実際に民族自決主義で新しい国がどんどん出来ると、当然、新しく国境線が引かれますから、交通や物流はますます不便になります。「国境がどんどん出来るなら、その国境の壁はなるべく低くしよう」。そうなるのはごく自然です。EEC から EC へ、EC から今の EU (欧州連合) へというこれまでの EU の拡大と深化の過程は、旧東ヨーロッパの状況からして、必然の歩みではなからうかと思えます。

国名表記へのこだわり

チェコのみならず、隣国のスロバキアでも、ハンガリーでも、ポーランドでも、政治の安定と経済の発展に懸命に努力しています。しかし、チェコに限らず、中央ヨーロッパの国々は最後の拠り所は文化であると認識しているように思われます。チェコの文化はチェコ語であり、チェコの芸術です。人形劇はチェコ語を守るために大切な芸能でした。コンサートやオペラなど音楽の活動は極めて活発で、日本と比較してとても安い料金でオペラやコンサートを聞く事が出来ます。

私はチェコ語がほとんど出来ません。しかし、少しでも理解するためチェコ語を勉強しようと思ったのですが、それほど上手く行きませんでした。チェコ語はキリール文字ではなくローマ字を使いますので、使用文字はロシアやブルガリアとは違います。難関は格変化です。ロシア語の格変化は 6 格、ドイツ語は 4 格ですが、チェコ語は、主格、生格、与格、対格、呼格、前置格、造格の 7 格あります。しかも固有名詞も格変化します。私の場合、主格は「ISHIDA」ですが、呼格は「イシドゥ (ISHIDO)」になりますから、呼格を使って呼びかけられると、日本では別の名前になってしまいます。歌舞伎では「忠臣蔵」に石堂右馬之丞なる人物が出て来ますが、どうも自分の名前という気がしません。なお、ラテン語では呼格は、「Quo vadis, domine? (主よ何処へ行き給う)」の domine とか、Brutus (ブルータス) を Brute (ブルテ) と変化する「Et tu, Brute! (ブルータス! お前もか)」等、我々の知っている言葉にも出て来ます。

チェコ語の文字は 35 文字。これもなかなか大変です。基本のアルファベット 26 文字にハーチェク付き文字 8 文字。また、C と H が続くと 1 文字扱いになります。また、子音がたくさん使われます。今、CH は 1 文字と言いました。

ヴルタヴァを歌う老婦人の涙

チェコ人の音楽への思い入れは極めて強いものがあります。最近のチェコのオペラには時に驚かされます。特に年配の方から「これは一体何だ？」と言われるような斬新な演出のオペラが結構あります。大胆な演出は概して不評ですが、そんな批評に耐えた演出が古典となって残るのかも知れません。ともかく、チェコ人はオペラやコンサートをとても愛しています。

私がプラハに赴任した1999年の年末、ドヴォルザーク・ホールで「モルダウ（ヴルタヴァ）」のメロディで知られる交響詩組曲「わが祖国」を聴きました。私の横の席には、老婦人が座っていました。90歳近いようなお婆さんですが、「ヴルタヴァ」のモチーフのところで、歌い出すのです。決してうまい節回しではありません。それでも小声で懸命に歌っています。私は思わず見ました。彼女は歌いながら目に涙をためています。おそらく、彼女の生きてきた20世紀は苦しい時期が長かった。そういうチェコの人々が今ようやく自由を獲得し、コンサートをも楽しんでいる。そんな過去からして、「ヴルタヴァ」を聴くと思わずメロディが口について出るのでしょうか。「やめてくれ」と言うどころか、私は感動をもってお婆さんの小声の歌を聴いていました。

ひたすら観ること・聴くこと

(図 17) これはプラハの国民劇場です。ここではチェコの人々の作曲したオペラやチェコ独特の演出のオペラを数多く上演します。



図-17

(図 18) これはプラハ国立オペラ座。世界で有名なオペラを上演する劇場です。写真を撮った日の演目は「トスカ」でした。



図-18

(図 19) これはスタヴォフスケー劇場。モーツァルト劇場とも呼ばれます。モーツァルトの映画「アマデウス」の劇場場面はこの劇場で撮影されました。



図-19

私はチェコに赴任するに際し、薫陶を受けた政策研究大学院大学の吉村融学長、前原子力安全委員長代理の住田健二先生などから、「チェコでは大使として是非しっかりやっては欲しいが、時間があつたらなるべく音楽をたくさん聴きなさい」と言われました。そこで、私は、音楽鑑賞力を付けなければならなくなりましたが、私はそれほど西洋音楽を聴いておりません。「どうしたら音楽鑑賞が上手くなりますか」と、私の知り合いの音楽鑑賞家に聞きました。「それは明らかです。音楽をひたすら聴く経験を重ねる事しかありません。本を読んで理屈を覚えてもしょうがありません」。それが彼の明快なる処方箋でした。私はそれに従って、約束がない夜にはコンサートやオペラに行きました。

プラハではオペラ「ナブッコ」を頻繁に上演しておりました。これはヴェルディの若書きで第3作目の作品ですが、実質第1作と言っても良いのかも知れません。「柔よく剛を制す」。バビロンの捕囚の際、ヘブライが当時の有力国バビロニアによく対抗した事を時代背景とするオペラですから、つらい時期が長かった東ヨーロッパの人々、チェコやスロバキアの人々の気持ちに訴えるところが大きいのでしょう。

(図 20) この字は「嫩(なぶる)」です。場面は、娘のアビガイッレが父ナブッコ(ネブカドネザル)から王位を篡奪しているところです。二人の娘が父親のナブッコを巡って、あるいは恋人を巡って対立するところから、「嫩児」(ナブッコ)と勝手に漢字タイトルを作ってみました。



図-20

(図 21)これは同じ劇場の「アイーダ」です。

考えてみますと、人間というのは、決して生まれながらに大きな能力を持っている訳ではなく、持っているのはポテンシャルだけではないでしょうか。いかに良い経験、素晴らしい経験を積み重ねるか。それによってようやく人間は高い能力を獲得出来るのではないかと思います。音楽や絵画などにおいて美しいものを感じる能力すら、経験を重ねる事によってしか磨かれないのではあるまいかと、しみじみ思いました。



図-21

日本文芸の双方向性

経験の量という事では、何と言っても中国でしょう。何せ歴史が長い。人もたくさんいる。周辺に多くの民族がいる。西域の国々とも交流をしている。人間社会で起こりそうな事は、中国の歴史の中に見つける事が出来るとすら言えそうです。そこには統治があれば、文芸もあり美術もある。戦いがあり裏切りがある。人間がたくさんいて経験の蓄積の大きな国は、人間そのものを良く知っているとも言えましょう。それに対して我が国の場合は、欧米の地図の右の端、東の果てにあって、いろいろな文物を次々に受け入れて来ました。受け入れながら国内でそれを熟成して行く。その繰り返しが古典文学、あるいは古典芸能として結実したのではないかと思います。

そこで、我が国の日本語による文芸とは何であるか、しみじみ考えさせられます。日本語を本当に理解するのは日本人です。日本人が作る短詩形の文芸である短歌や俳句は、国際的にどのように理解されるのでしょうか。序詞、掛詞、枕詞などはどのように受け止められているのでしょうか。

序詞の場合。柿本人麻呂の「あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む」。「長い夜を一人寝ていますよ」の「長々し」を出すのに、「あしひきの山鳥の尾のしだり尾の」と言葉を続けている。これには一体どういう意味があるか。英語にしたらどうなるか。掛詞では、藤原定家の「こぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」の一首。何の事が、おそらく日本人でもなかなか分かりません。「藻塩を焼くように私の身は焦がれていますよ」。他の方法で表現しようとしたら説明にしかありません。そのような事を、どうしたら広く理解してもらえるか。芭蕉の「冬の日」は連句集のようなものですが、私は今読んで、なかなか理解する事が出来ません。

我々の先祖が作り上げて来た文芸は、全くその場その場のローカルな表現に過ぎないのではないかと。我々は極めてローカルな、世界的に通用しないような言葉でその場の気持ちを表して来ただけではないか。明治の先人は、その意義の発見にとっても苦労したと思われる。明治時代の1873年、お雇い外国人としてバジル・オール・チェンバレンが東京大学にまいりました。彼は日本をよく愛して、上田万年先生とか、立派なお弟子さんをたくさん持ちました。そういう先生ですが、

日本人の詩歌文学については、「どうもヨーロッパ人より劣っているのではないかと思う。私は『万葉集』以外のほとんどの日本の詩歌を読んだが、『万葉集』を除く日本全体の詩歌は、ワーズワースの詩の数編ほどの創造力も含んでいない。非常に残念だけれども、そうだ」と言ったそうです。

そういう事を言われて、明治の人は、日本の特色を求めて懸命になります。そこで、いろいろな文学者がいろいろな努力をして、『源氏物語』の価値も再発見し、日本文学の独自性を見つけ出して来ました。

桑原武夫先生の『俳句第二芸術論』に関する議論は、その線上にあるような気がします。「第二芸術」は薄い本ですから私も何度も読みました。読んで、膝をたたきながらも、衝撃を受けました。しかし、今は、それだけではないだろうという気持ちです。

我々が先祖から受け継いで来たものの特色の一つは、インタラクティブ（双方向）性を持つ文芸、即興の文芸、多くの人達が対等な立場に立つ文芸の形式を持ったところにあると思います。決してローカリティに埋没する訳ではなく、一期一会のものとして形成されたグループ、座。その「座の文芸」を我々の先人は発達させて来たのではないのでしょうか。どんな人間でも「これが普遍だ」と言い切れる場にはいません。我々の先祖は、それぞれローカルな場にながらも、鋭く自然と人事を普遍的に切り取るという事をやったのではないかと思います。

歴史を彩る人々



図-22

(図 22) これは私が今住んでいる金沢の石川門の桜です。先ほどのチェコの桜を思い出していただきますと、やはり日本の桜は綺麗だなと思います。現在、私はこの石川門のすぐ近くにおいて、「連句」に関心を抱いています。最近巻いた「半歌仙」18句をお配りしたものに書いておきましたが、お読みいただくようなものでもありません。

我々が先人から引き継いだ伝統文芸や伝統芸能は、連句のみならず、短歌、俳句、能狂言、歌舞伎文楽などさまざまですが、何と云っても歴史に残る人々、歴史上非常に活躍した人々、いろいろ特異な事をした人々、そういう人々がこれらに登場して、我々の心の世界を豊かなものに

ています。我々はそういう人々に関する伝承を受け継いでいます。伝承ですから実際に起こった事ばかりではありません。もちろん伝承には史実の部分もありますが、それにたくさんのフィクションが加わって全体のストーリーが形成されています。我々の歴史で豊かな伝承をもつ人物を多数輩出した事は、とても有り難いと思います。菅原道真、坂田金時・金平。弟の金平の方は、今でも「きんぴらごぼう」に名を留めておりますように非常にパワフルな人でした。それから源義経、曾我兄弟、太平記の世界、豊臣秀吉、その他枚挙にいとまがありません。そういう人々が、文芸を彩り、芝居となり、今に至るまで語られ演じられて来ました。



図-23

(図 23)これは昨年12月半ば、坂田藤十郎丈の襲名披露興行を、京都南座に観に行った時に撮った写真です。荒事の市川團十郎とならぶ江戸時代の和事の大きな名跡の、坂田藤十郎が復活したのはとても嬉しい事でした。

金沢で復活した7町名

名前の復活といえば、金沢市では、大切な町名が失われて行く事を惜しんで、この6~7年間に、かずえまち とびうめちょう主計町、飛梅町、きくらまち下石引町、木倉町、柿の木畠、六枚町、並木町という七つの町名を復活しました。町名変更は大変です。これをしたところで直接のメリットはありません。住民は自分のアドレス変更の案内状を出さなければならない。その説得は容易ではありませんが、市は懸命に努力しました。町名復活の町はいずれもあまり大きな町ではありません。その中で、私の住む飛梅町は面積はともかく、住民は私も含めてわずかに12~13戸。このような町であるため、町名復活がやりやすかったのでしょうか。

「飛梅」の町の復活を喜ばれた太宰府天満宮の宮司さんは、今年の2月21日金沢にお見えになり、太宰府から持って来られた黒田紅梅と加賀白梅を植樹されました。(図 24) 太宰府天満宮からお見えになったのは西高辻信良宮司さんをはじめ、味酒安則禰宜さんたちでした。味酒(みさけ)さんの姓は、もともと「うまさけ」と読んだ筈で、菅原道真公が亡くなるまでもその後ずっと菅原家をサポートして来られたお家です。さらにその前から御活躍で、大和国の平群(へぐり)のあたりにおられた豪族との事。壬申の乱で大友皇子に味方したために都から遠ざけられ、光仁天皇の世となって都に戻ったと伝わっているそうですから、長い長い歴史の持ち主です。そのような方が、菅原道真公の流れの西高辻宮司さんと共に、現代でも日本と地域のために縦横に活躍しておられるのですから、歴史の深みというものを実感せざるを得ません。



図-24

芝居から何を学ぶか

菅原道真公が登場する芝居が「菅原伝授手習鑑」です。もともとは人形浄瑠璃の演目で、すぐ歌舞伎に導入されました。江戸時代の戯作者は、歴史上著名な人物を芝居に書いております。しかし、偉い立派な人を主役にしながら戯作者の視点は、そのような上の人を支える人、上と下という表現は適当でないかも知れませんが、だんだん下の方の人に降りて来る傾向があるようです。「菅原伝授手習鑑」で一番有名な「寺子屋」の場では、今のドライバーにあたる牛飼舎人の三つ子の兄弟の一人松王丸が、自分の子供を犠牲にして大きな働きをします。

「義経千本桜」の場合は、義経が第一の主役ではなく、平家の人々の後日談として、二段目では知盛を、三段目では維盛を、四段目では教経をそれぞれ描こうとしています。彼らは壇ノ浦の合戦で負けて、戦死した事になっているけれども、実は生きていたと言うのが「義経千本桜」発端のフィクションです。生きていた彼等が、義経や源氏の人々にどのように絡んだかを示すのがこの芝居の眼目ですが、三段目の主役は、維盛というよりいがみの権太です。四段目では教経ではなく、狐忠信が主役になっています。

「仮名手本忠臣蔵」は、今述べた二つの戯曲とともに義太夫の三大古典名作に挙げられますが、何せ、主役たるべき赤穂義士は47人もいるのですから大変です。とても47人を細かく書けない。そこでどうしたか。トップの大石内蔵助(大星由良之助)と一番底辺の、47人に入るか入らないかカツカツの、討ち入りした46人の中には入っていない萱野三平(早野勘平)と寺坂吉右衛門(寺岡平右衛門)の二人に焦点を当てたのです。しかも、お軽という女性が寺岡平右衛門の妹で、早野勘平の妻になったとする事によって、底辺の二人を結びつけました。この二人と頂点の一人を結ぶ三角形で47人を表しているように思います。この芝居でも、下の方の人に温かい目を注いでいます。



図-25



図-26

(図 25)(図 26)これは義太夫物ではなくて長唄で演じる歌舞伎十八番「勸進帳」の舞台面です。実は、私の田舎の子供達が演じている「勸進帳」で、長唄の人がたくさんいます。そもそも安宅の関の一件とは、頼朝と義経が御仲不和となったあと、義経、弁慶一行が、安宅の関を通過する一幕の歌舞伎劇です。安宅は私の出身地から3キロから4キロ先の所ですが、「安宅の関」は本当にあったのかと言う事になりますと、義経が北陸道を都落ちするエピソードが詳しく書いてある『義経記』を読んでも、「安宅の渡」とはありますが、「安宅の関」とは書いてありません。義経、弁慶が、実際にここを通った可能性は、この土地の出身者としてはとても辛いのですが、必ずしも高くはないように思えます。では、安宅の関の一件は架空のことで、価値のないことかと言うと全くその逆で、このような「伝え」を練り上げてきた我々の先人の創造力、いにしえを愛し、人の心の働きを大事にする気持ちは、我々にとってこの上なく貴重な遺産のように思われるのです。

さて、弁慶、富樫、義経の3人は、それぞれ大きな人間的魅力を発揮するものの、3人の行動や態度は、ネガティブな要素をはらんでいます。弁慶は言葉巧みに嘘をついて難関を突破しようとする。人を騙そうとしたのです。富樫は事情を知りながら義経・弁慶を見逃したとしたら大変な背信で、頼朝に対する裏切りです。過失ならば大失策です。義経はすっかり無力で何も出来ない。全く弁慶に頼りきりです。このような3人ではありますが、それが人間としての大きな徳性を発揮する事につながります。弁慶は実に博識で、また勇気もある。そして至誠の心で縦横に機略を発揮する。弁慶は「知勇」の2文字で表現されます。これに対して、富樫は「人情」、義経は「品格」です。勸進帳のご当所である小松市では、弁慶の「智」、富樫の「仁」、義経の「勇」と表現します。義経の「勇」はあまり良く解からないのですが、平家打倒に神のようなスーパーパワーを発揮した義経は、ここでは、完全に無力化し、現世を超越した存在になってしまっている。この世のものとは思えないような態度で、まな板の上の鯉ともいうべき潔さです。それを「勇」と表現したのではないのでしょうか。能「安宅」では、義経は子方が演じます。

「勸進帳」は、長唄が伴奏音楽ですが、「忠臣蔵」や「菅原伝授」等はみな人形浄瑠璃にもとを発していますので、義太夫節が使われます。長唄は唄い物、義太夫は語り物です。語り物は我が国の大切な伝統であり、「義太夫は諸芸の司」という表現すらあります。義太夫では、「掛け合い」を除いて、太夫が一人で地の文章もセリフも語って物語を展開して行きます。もちろん、三味線弾きの存在もとても大きいのですが、このような語りの芸を育てて来た事も我が国の特色と言えましょう。今は講談、落語、浪花節など、語りの芸、話の芸が花開いています。

人間は弱い者と認識する

私達は芝居から、「人間とは極めて弱い者」という事を学ばなければいけないのではないかと思います。例えば、「仮名手本忠臣蔵」の五段目、六段目に出て来る早野勘平（実名萱野三平）のケースです。この部分は全くのフィクションですが、勘平が主君塩冶判官（実名浅野内匠頭）の敵討ちに提供する資金の調達を迫られているのを見て、勘平の舅の与市兵衛は、自分の娘のお軽、つまり勘平の妻を祇園の花街に売る事を決め50両を手にしします。50両は手付の半金ですが、このせっかくの50両を持ち帰る途中、暗闇の山崎街道で悪党の斧定九郎に奪い盗られ、刀で殺されてしまいます。ところが、その直後、勘平がその定九郎を暗闇の中で猪と間違えて鉄砲で撃ちます。定九郎はバサッとその場で死んでしまう。定九郎は登場時間が極く短い役ですが、舞台に悪の花を咲かせるなかなかの役です。勘平は誤って人を撃ち殺した事に驚くけれども、その死体を探ると懐に50両がある。その50両に触った途端、勘平はこれは軍資金にちょうど良いと思い、ついつい自分の物にしてしまいます。ところが、それを家に持ち帰ってみると、財布の柄から舅与市兵衛の物だった事が分かる。舅の死骸も運ばれて来る。「お前がその柄の財布を持っているという事は、さては舅を殺して奪ったな」と、姑に非難され、ついに勘平は切腹します。しかし、結果的に全てが解明され、50両は悪い金ではなく、また、結果的には舅の仇を討った事が明らかになって、「お前も仲間だ」と義士の連判状に名前を加えて貰える事になります。このくだりを我々はどう考えるべきでしょうか。人間は必要に迫られれば、敵討ちを言う大義名分を貫くためではあっても、ついつい良くない行動に陥り、悪い事に手を染める事があると教えているようにも思えます。



図-27



図-28

(図 27) これは早野勘平の錦絵と(図 28) 斧定九郎です。両者、登場時間に長短はありますが、見せ所はたっぷり。特に勘平は、昔の素人芝居で役の割り振りをすると、大体皆さんなりたがる役と言われて来ました。

さて、もう一つは、「摂州合邦辻」の玉手御前です。この人は、年配者に嫁いだ若い後妻で、美男の義理の息子に恋心を抱くという筋です。これには一応タテマエがあって、義理の息子が家督相続するのに邪魔が入りそうになり、その邪魔から逃れるために、一旦わざと病気にします。その病気は、自分の血を飲ませれば治るとされています。この若い義理の息子に道ならぬ恋を仕掛ける。ところが、そのようないけない恋をすれば、自分の父親に怒られるのは当たり前で、ついに斬られてしまいます。その時、流れ出た血を病気の義理の息子に飲ませて、彼は病気が治り家督相続もかなう。義理の息子のためにあえて命を捨てて邪恋を仕掛けたと言う訳です。しかし、彼女のホンネは、「年配者に嫁いで苦労したのだから、一度は若い男とホンモノの恋をしたい」という事であったかも知れません。人間は、タテマエを言いながら、ホンネが別にある事も多いようです。芝居の中の相撲では、「双蝶々曲輪日記」の濡髪と放駒の一番のように、勝負を譲ることが義理と絡んでポイントになる事があります。

芝居は、人間の複雑な弱さを認識させてくれるように思います。人間は一面、してはならない事、望ましくない事を行いやすい存在だからこそ、行動をよく慎まなければならないと教えてくれているのではないのでしょうか。

研究者のビヘイビアが問われる時

最近、専門的職業の人の不正行為が目につくようになりました。こんな事が多発すれば社会の崩壊につながりかねず、とても憂慮すべき事態だと思っております。耐震強度の問題もありましたが、最近は研究のデータ捏造疑惑が起こり、日本学術会議では、この種の問題にいかに対応するか議論されております。文部科学大臣の諮問機関科学技術・学術審議会でも、虚偽の成果発表、データの捏造などをいかに防ぐか審議が進められています。

考えてみますと、研究と言うものは、最終的には一人ひとり個人の営みです。そして現在、研究テーマについて、「競争と評価」「選択と集中」と言う事が盛んに言われています。そんな中で、極く極く一部の研究者が、何としても成果を出したいという思いが強くなるあまり、道を踏み外すとすればそれはとても残念な事です。研究者も社会に生きる人間ですから、なるべく自分に光が当たる事も期待します。自分の収入が増える事だって嬉しい。ただ、研究者はそんな事だけではなくて、自分の身を投げ打って国民全体の知的資産の形成に貢献したいという気持ちも持っている人々です。巨額にのぼる研究開発投資を現場でこなす人々として、国民の負託に応えるためにも、研究者が厳しく自らを律し、本来の大きな目的に向けて邁進して欲しいと願わずにはおられません。

ご承知のとおり、2006年度から始まる「第3期科学技術基本計画」は、最終決定がもうすぐでほとんど固まっています。第3期計画では、科学技術の投資規模が25兆円という大きな規模が示されました。これほど大きな額が国民の税金から支出されるという事になると、研究者一人ひとりが広く国民から信頼される事が何よりも大切になります。この計画では、科学技術を進めるに当たって、「モノ」の要素も大切だけれども、「ヒト」の要素がさらに重要であるという趣旨が

盛り込まれています。今後の科学技術の発展は、専門家と一般国民の間に、さらに太い信頼性のキズナを作り上げて行けるかどうかにかかっていると思っております。

多くの一般の人々は、科学技術に安全・安心を求めています。最先端の技術が我々の身近に入って来ても生活がかき乱されず、また、憂いや心配事に煩わされずに、この世に長く生存し得るための科学技術を、しっかり推進して欲しいという事でありましょう。そこで、医療、食糧、災害防止等々の分野での取り組みが強化されて来ていますが、こういう分野のさらなる発展を期するためには、我々はいかに知らない事が多いか、科学技術的知見を蓄積しなければならないか、そんな事がしきりに感じられるのです。

個人情報と匿名社会

現在、気になっていますのは、個人情報保護法の下での教育に関する情報の円滑な伝達です。大学の中でも教育や研究のための意思疎通において、個人情報保護に格段の配慮を払うようになりました。個人情報の保護はとても大切な事ですが、現場でのこなし方によっては、時に、学生たちとの情報のやりとりも滞ります。以前は、宿題をして来なかった人、レポート未提出の人は掲示板に名前を張り出したようですが、今は、連絡は名前は使わず、学籍番号でやっております。しかし、番号では迫力が不足するという事もあります。何とかそれはカバーする努力をしていますが、同窓生名簿をいかに作るかとか、個人情報の適正な取り扱いを徹底する事は容易ではありません。そして、道を間違えると、果ては匿名社会になってしまう恐れがあるように思われます。匿名社会は、結局、責任を持たない発言、責任を持たない行動につながります。ネットワーク上の匿名の意見交換の場は言いたい放題です。それではいけないと思います。教育の場、あるいは研究の場における個人情報については、もっと責任を持って出すべきものは出すという事にしなければいけないのではないのでしょうか。

我が国の文化の特質は、プロセス自体を透明性を持って進めると言うところにもあります。ご承知のように文楽の人形は「出遣い」で、人形遣いが堂々と舞台に姿を現します。景事とか所作事とか言われる舞踊劇では、人形遣いが袂を着て遣う事すらあります。人形遣いも見られる事が想定されている。我々は全てクリアな、透明な状況で仕事をするという伝統を育てて来たのではないかと思います。お茶でもそうです。客人の目の前で点てる。「炭手前」という言葉すらあります。私の高校同級生のお茶の宗匠は、炭の置き方、炭の姿もよく見るようにと指導してくれます。これが我々の伝統であり、我々が育てて来た事ではないかと思います。我々は、芸事でも仕事でも、それをクリアに一步一步進んで行く道として認識する性向を持っていると言えましょう。

プロセスの大切さ

今度、国際熱核融合実験炉計画 ITER (International Thermonuclear Experimental Reactor) が、いよいよ実験炉を建設する事になり、フランスのカダラッシュがサイトに選ばれましたが、この Iter はラテン語で「道」という意味を持っていると聞かされました。我々の欧米の仲間も「道」という考え方の意味が理解されて来ているのかも知れません。

(図 29) チェコでは、人形劇がチェコ語を支えて来たと言われていました。今も観光客などを相手に頻繁に上演しているオペラ「ドン・ジョバンニ」の人形劇では、操り人形の糸が太いのには気づきます。「人形の糸が太すぎる。もっと細くした方が良いのではないか」と言う人もいます。「しかし、紐は太いから良い。人形が巧みに操られる過程を見るのも良いのではないか。所詮、操り人形なのだから、太い糸の方がより人形劇らしくて良い」私はプラハでそう主張していました。



図-29

(図 30) これはドン・ジョバンニの人形劇オペラのポスターですが、ドン・ジョバンニの人形は見るからに悪党です。人間が演ずるオペラ歌手はなかなかこんな顔には作れません。ドン・ジョバンニは、女性と見たらその尻を追っ掛ける。ただし、年寄りの女は嫌い。極めてはっきりしています。悪行を重ねて、最後は地獄に引きずり込まれてしまう。でも死んだ後、女性も含めて周囲の人々は、「ドン・ジョバンニがいないと寂しいね」と感ずる。そういう独特の人間です。このドン・ジョバンニの人形劇を見て、改めてプロセスが透明であると面白いと感じ入ったのであります。



図-30

(図 31) また去年たまたま本田財団のプロジェクトでベトナムに参りましたが、そこで水上人形劇を観ました。濁った水の中にあるパイプを通して人形を操作し、人形は水の上でいろいろ所作をします。最初、どのようにして人形が動くのか、その過程が不思議で、不透明なプロセスもまた玄妙と感じたのですが、田圃の中の人形劇のように思えて、いかにも米産地ベトナムらしい人形劇だと感動し、それとの対比で、我が国の文楽の透明性に思いを馳せたのでした。



図-31

写真提供：麗澤大学外国語学部 金丸良子教授

日本が向かうべき新しい道

私がプラハを辞去して来る直前、それはアテネ・オリンピックの前でしたが、たまたまギリシャ大使と話す事がありました。ギリシャ大使は、「アレキサンダー大王はそれぞれ征服した地域に責任者を置いて文化を広めた。また、アレキサンダー大王はいつも枕頭にホメロスの詩集を置いていた。そのアレキサンダー大王の行動によってヘレニズムが広がった」と語りました。ヘレニズムはご承知のとおり、ヘブライズムと共に西洋文明の骨格を形成しております。

日本が向かうべき新しい方向は、どうなのでしょう。日本はいろいろなものを導入し、さらに中国の経験、西洋の経験、いろいろな経験を取り入れて、自らの経験も重ね、それを内部でゆっくりと熟成して来ました。そういう伝統に加えて、現在の日本の繁栄をもたらした現代科学技術を発達させました。研究開発だけではなく、それを円滑に実地に利用し、産業だけではなく、安全・安心の世界を構築すべく懸命の努力をしています。日本はヨーロッパで使っている地図で言えば、確かに極東であって一番右の端っこにあります。しかし、端から世の中が変わって行くという事もあります。ヨーロッパでもイベリア半島のスペイン、ポルトガルの2国はその先鞭を付けました。イギリス、フランスもヨーロッパ全体からすれば大西洋に面した西の方の国です。こういう国々が世界に展開したように、日本は、十分に練り上げられた日本的伝統と、西洋文明を迅速に消化吸収し、自分のものにして来た力とをうまく融合出来れば、これからの世界文明の展開の旗手になる可能性があると思います。極東から21世紀以降の人類の進歩と平和に貢献出来るのではないのでしょうか。

以上はギリシャ大使との会話から私が思った事ですが、今申し上げたような「融合」が新しい日本の風格の形成に繋がって行くのではないかと考えております。

今、我々の周辺は決して明るい話だけではありません。そういう中であって我々は、進むべき道を見失う事があるとは思いません。一面では何と言っても伝統を大事にする事。他面、新しいものに積極的に取り組んで行くこと。神学者ニーバーが言っております。「神よ、我々に変える事の出来ないものを受け入れる冷静さと、変えるべきものを変える勇気と、それからその両者を区分する知恵とを与え給え」と。我々は何を変えず何を変え、どういう方向に持って行かなければいけないのか。それはまさに我々の前途を大胆に切り拓きながら、我々の先祖が育てて来た、日本的伝統を大事にして行くと言う事ではないのでしょうか。現在、若干景気は上向いておりますが、さらに我々は変えるべきものを変えながら、新しい日本人の生活、新しい国際交流を目指して行く。それによって我が国は、世界の中で必ず大きな役割を果たす事が出来ると、チェコから帰り、金沢で生活しながら確信しているところであります。

以上いろいろな事を申し上げようとして、上手くまとめられませんでした。これが私の今の思いであります。せっかくチェコに赴任させていただきながら、大した仕事も出来ずに帰って来た事については慙愧の至りであります。これは決して大河原大使を初めとする元の上司の御指導のせいではなく、教えを受けた生徒の方がいけなかったのです。しかし、私は64歳ですが、まだまだ若いと思っておりますので、懸命になって金沢で、そして東京で務めたいと気持ちを新たにしております。また、よろしく願い申し上げます。

注) チェコ語の表記では、ハーチェクと長母音記号は省略しました。